

第6回講義 (20160603)

- § 1 導入：「あなたは相対主義者ですか」と問う理由：
- § 2 相対主義とは何か？
- § 3 クーンのパラダイム論あるいは概念枠相対主義
- § 4 Davidsonによる概念枠相対主義への批判

§ 5 パラダイムの共約不可能性と Davidson の概念枠批判の關係の考察

4 デイヴィドソンはどこへ向かっているのか？

(1) 疑問点：一つの概念枠が存在する可能性はないのか？

デイヴィドソンは次のように言う。

「枠組みが異なることを理解可能な形で言いえないとすれば、それらが同一であることもまた理解可能な形では言いえない」訳 212

疑問：直観主義論理などの様々な論理学が考えられるまでは、西洋では伝統的に論理は一つだと思われてきたのではないのか、その時にも一つの論理学が理解可能な形で記述されてきたのではないのか。かつて、伝統的論理学は、唯一の概念枠として理解されていたのではないのか。

(2) 彼は、どのようにして理論を選択するのか？

デイヴィドソンの言うように、二つの科学理論が共約可能、相互に翻訳可能であるとしても、彼は、経験論を否定するので、経験によってどちらの科学理論が優れているかを決定することはできない。つまり、パラダイムの共約不可能性を否定しても、パラダイム間の理論的選択不可能性の問題は、残ったままである。

(a) クワインならば、プラグマティックな選択を主張するだろう。

「カルナップやレイスやその他の人々は、様々な言語形式や科学の枠組にあいだでの選択の問題について、プラグマティックな立場をとっている。しかし、かれらのプラグマティズムは、分析的と総合的との間にあると想定された境界のところで終わりを告げる。こうした境界を拒むことで、私はより徹底したプラグマティズムを支持する。[...]持続する感覚的刺激に合うように科学的遺産に変形を加える際に指針となる考慮は、合理的たらんとする限り、プラグマティックなものなのである。」(クワイン『論理的観点から』飯田隆訳、勁草書房、「第二章 経験主義の二つのドグマ」69)

(b) ローティならば、二つの科学理論は互いに競合しないというのかもしれない。

「ニュートンは、アリストテレスが間違っただけで答えた問題に正しい解答をあたえたのだろうか。それとも彼らは別の問いをたてていたのだろうか。」(ローティ『哲学と自然の鏡』野家啓一産業図書、305)

「ここには確定した答えがあるはずだと考える理由は、さしあたり大雑把に言えば、真理追及の歴史は詩歌や政治や衣服の歴史とは異なっているはずだと考えるところにある。」306

ローティは、この箇所では、二つの科学理論が同じ問いを問うているのか、異なる問いを問うているのかという問いに対する確定した答えはない、と考えている。

もし二つの理論が、同じ問いに対する異なる答えであれば、それらは矛盾ないし競合するだろう。もし、異なる問いを立てているのだとすると、直接には矛盾、競合しない。しかし、この場合には、「どちらの問いを採用するのか（採用すべきか）」を問いたくなる。

ローティは、科学的問題についてはではないが、哲学的な問題については次のように述べている。

「哲学の新しいパラダイムは、古い哲学的諸問題を新たに述べなおす新しい方法を述べるのでも、その問題を解くのもなく、むしろそれを傍らに押しやるのだとする見解をとる」（前掲書、302）

「話題の選択は、弁証法的必然性によるわけではない。・・・様々な出来事の結果として、あるいは何か斬新なことを考えている個々の天才が現れた結果として、もしくはそのようないくつかの力の剛力としてなされるのである」（303）

「哲学的変貌は、…ひとくみの新しい問題が生じて、古い問題の影が薄くなりだす時なのである」303

ローティは「話題や問題の選択は、理論的には決定できない」と考えているように見える。そのこと自体の論証はここにはない。おそらく事実としてそうだと主張しているだけなのだろう。彼は、「話題設定や問題設定についての相対主義」を主張しているといえるのではないだろうか。

ローティにおける翻訳可能性と共約可能性の区別

（以下の箇所については、朱喜哲さんから教えられた。）

ローティは『哲学と自然の鏡』第6章の注 35 で**翻訳可能性と共約可能性を区別すべきこと**を次のように述べている。

「(35) 残念なことにデイヴィドソンは、この論文で、クーンが「共約不可能」によって「翻訳不可能」を意味していると誤解している。本書における私の議論にとっては、この二つの概念を鋭く区別することが肝要なのである。第七章第1節を参照せよ。」363

その第七章第1節では、次のように述べている。

「「共約可能」ということで私が意味しているのは、諸言明が衝突しあうと思われるあらゆる点に関する論争を決着するに際して、いかにしたら合理的な一致が得られるのかを示すような一連の規則をわれわれが持ちうる、ということである。これらの規則は、除去できなかったあらゆる不一致が「非認識的なもの」か、たんなる言葉上のものか、あるいはさもなければ単に一時的なものにすぎない——もっと努力すれば解決できるもの——かのいずれかであると判別するような、理想的状況の構成方法を示してくれる。」(368)

ここでの「共約可能」というのは、意見の不一致が、言語の違いなのか、意見の違いなのか、決定できるということではないだろうか。その意味であるとする、デイヴィドソンはこの「共約可能」を認めないだろう。

「デューイ、ウィトゲンシュタイン、クワイン、セラーズおよびデイヴィドソンらに一様に認められる、知識と意味についての全体論的で反基礎づけ主義的、プラグマティズム的な扱いは、そのいずれもがほぼ同じように、多くの哲学者にとって不快の種となっているが、その理由はまさに、彼らが

共約化の追求を放棄し、それゆえに「**相対主義者**」であるということに他ならない。」(367)

もしローティのいう「共約可能」が、意見の不一致の原因を、言語の違いか、信念（意見）の違いか、一義的に決定できるといふならば、デイヴィドソンはそれを認めない。デイヴィドソンにとっては、それを認めることは、部分的な翻訳不可能性を認めることになり、概念枠相対主義を認めることになるだろう。

ところで、意見の不一致と言語の違いを区別できるとすると次の問題に答えられるのではないか。

「ニュートンは、アリストテレスが間違っただけで答えた問題に正しい解答をあたえたのだろうか。それとも彼らは別の問いをたてていたのだろうか。」(ローティ『哲学と自然の鏡』野家啓一産業図書、305)
しかし、ローティは、これに答えられないと述べていた。そうするとこの二か所は、矛盾しないだろうか。

(c) 二つの科学理論の競合の可能性について

ここではパラダイムは互いに共約可能（翻訳可能）であると仮定しよう。このとき、二つの科学理論が設定する問いは、同一である場合と異なる場合がある。

「同じ問い」であるための必要条件

- ・同じ言語ないし概念枠で語られること
- ・同じ疑問文であること

あるいは

- ・問いの「意味論的前提」(注)が同じであること
- ・問いの「認知的前提」(注)が同じであること

「異なる問い」であるための十分条件

- ・上記の条件を少なくとも一つ満たさないこと

「同じ問い」に対する答えが競合するための必要条件

- ・同じ言語ないし概念枠で語られること
- ・同じ問いに対する答えであること
- ・両立しない答えであること

「異なる問い」の競合の可能性について

- ・異なる二つの問いは、それらの問いの前提が両立しないとき、両立しない。
- ・異なる二つの問いは、それらの問いのすべての前提が互いに両立するとき、両立する。

例えば、アリストテレス力学とニュートン力学の問いの前提には、両立しないものがあるのではないだろうか。

注：問いの意味論的前提と認知的前提

(1)意味論的前提

Q1：この鳥は渡り鳥ですか？

Q1は、いくつかの命題を前提する。

p1：この鳥は、渡り鳥か、そうでないかのどちらかである。

p2：「この鳥」の指示対象が存在する

p3：「この鳥」の指示対象は鳥である。

もしQ1が真の答えを持つならば、これらの命題は必ず真でなければならない。私はこのような命題を「問

いの意味論的前提」とよぶ。もし意味論的前提が成立しないなら、問いは無効(*invalid*)である。

(2) 問いの認知的前提

Q 1 はつぎのような異なる種類の前提を持つ。

p 4 : 質問者は「この鳥」の指示対象がどれであるかを知っている。

p 5 : 質問者は「渡り鳥」の意味を理解している。

p 6 : 質問者はこの問いの答えを知らない。

もし人が Q 1 をまじめに問うのなら、これらの命題は必然的に成り立たなければならない。私はそのような命題を「問いの認知的前提」と呼ぶ。

もし Q 1 の質問者が p 4 か p 5 を満たさないなら、彼女は Q 1 を質問することができない。これら以外にも認知的前提はあるだろう。p 6 は少し特殊である。もし彼女が p 6 を満たさないなら、そのとき彼女は質問の答えを知っており、Q 1 を問う必要がない。

ところで、たとえ Q 1 の質問者が認知的前提のすべてであるいはいくつかをみだしていないとしても、Q 1 は真の答えを持ちうる。この意味で、認知的前提は意味論的前提と異なる。

もし P がある問いの意味論的前提であるならば、彼女が P を信じていることは、質問者にとっての認知的前提である。上記の意味論的前提のそれぞれに関して、私たちは、次のような認知的前提を語るができる。

p 7 : X は、この鳥は、渡り鳥か、そうでないかのどちらかである、と信じている。

p 8 : X は、「この鳥」の指示対象が存在する、と信じている。

p 9 : X は、「この鳥」の指示対象は鳥である、と信じている。

私たちは、次のように言うことはできない。

p 10 : X はこの鳥が、渡り鳥か、そうでないかのどちらかである、と知っている。

なぜなら、p10 は強すぎるからである。X が Q3 をまじめに問うているとそうていしてみよう。

Q3 : 現在のフランス王は剥げていますか？

p11 : 現在のフランス王が存在する。

p12 : X は現在のフランス王が存在する、と知っている。

p11 は意味論的前提であるが、私たちは、p12 が認知的前提であるとは言えない。なぜなら p12 は成立していないからである。

(Cf. Yukio Irie 'Transcendental Arguments Based on Question-Answer Contradictions' in *Transcendental Inquiry: Its History, Methods and Critiques*, ed. by H. Kim and S. Haelzel, Palgrave Macmillan, 2016 (at press))

(d) デイヴィッドソンのスリングショット・アーギュメント

(講義ノート 2011ss01 からの転載)

真理の対応説批判 : Slingshot Argument

<もし真なる文が事実に対応するならば、すべての真なる文が同じ事実に対応する>という論証
<事例>

たとえば、今仮に、s 「雪は白い」と t 「草は緑だ」 が真であるとしよう。

このとき、次の4つの文は真である。これらは何らかの事実に対応しているでしょう。

a、s

b、 $\text{ix}[x = \text{Socrates and s}] = \text{ix}[x = \text{Socrates}]$

c、 $\text{ix}[x = \text{Socrates and t}] = \text{ix}[x = \text{Socrates}]$

d、t

このとき、この4の文は同じ事実に対応する。

<証明>

次の4つは、一般的に認められるでしょう。

① u と v が論理的に同値ならば、u と v は同じ事実に対応する。

② 同じ指示の確定記述を置き換えることによって、v から u が得られるのならば、u と v は同じ事実に対応している。

③ ' $\text{ix}[x = \text{Socrates and u}] = \text{ix}[x = \text{Socrates}]$ ' は論理的に u と同値である。

④ もし u と v がともに真であるなら、 $\text{ix}[x = \text{Socrates and u}]$ と $\text{ix}[x = \text{Socrates and v}]$ は同じ指示をもつ。

- | | | |
|------|---|-----------|
| (1) | s | (仮定) |
| (2) | t | (仮定) |
| (3) | $\text{ix}[x = \text{Socrates and s}] = \text{ix}[x = \text{Socrates}]$ | (1 と③より) |
| (4) | $\text{ix}[x = \text{Socrates and t}] = \text{ix}[x = \text{Socrates}]$ | (2 と③より) |
| (5) | $\text{ix}[x = \text{Socrates and s}] = \text{ix}[x = \text{Socrates and t}]$ | (3 と4より) |
| (6) | (3)と(5)は同じ事実に対応する。 | (②より) |
| (7) | (4)と(5)は同じ事実に対応する。 | (②より) |
| (8) | (3)と(4)は同じ事実に対応する。 | (6 と7より) |
| (9) | (1)と(3)は同じ事実に対応する。 | (①により) |
| (10) | (2)と(4)は同じ事実に対応する。 | (①により) |
| (11) | (1)と(2)は同じ事実に対応する。 | (9 と10より) |

「もし真な文が何かに対応していれば、真な文はすべて同じものに対応する、と示すことができる。しかし、これは対応という概念を完全に些末化する。もし対応するものが一つしかなければ、対応という関係に興味深い点はない。というのも、そのような場合常にそうなのだが、対応という関係は単純な性質Tに帰着してしまうからである」(デイヴィドソン『真理と述定』津留竜馬訳、春秋社、p. 53)。

すべての真なる命題が、一つの大きな事実に対応しているのだとすると、対応を語る意味がなくなる。

「もし文を真たらしめる存在者としての事実を放棄するならば、私たちは同時に表象も放棄すべきである。というのも、いっぽうの正当性は他方の正当性に依拠するから。」(同訳 p. 54)

「対応」も「表象」も放棄するなら、「指示」も放棄することになるだろう。また他方で、实在論を放棄することになる(参照、同訳 p. 55)。